

人とは何者なのでしょう

一創世記 2 章 7 節に記されている人間の創造に関して一

【新改訳改訂第 3 版】

神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は**生きもの**となった。

【新共同訳】

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして**生きる者**となった。

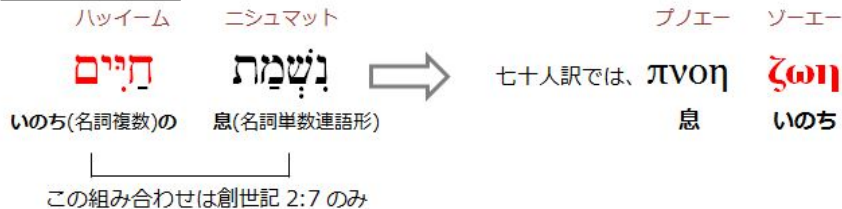
【KJV】

And the LORD God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils **the breath of life**; and man became **a living soul**.

【NIV】

the LORD God formed the man {[7] The Hebrew for <man (adam)> sounds like and may be related to the Hebrew for <ground (adamah)>; it is also the name <Adam> (see Gen. 2:20).} from the dust of the ground and breathed into his nostrils **the breath of life**, and the man became **a living being**.

A 「いのちの息」



B 「生きもの」



●人間の創造一つまり、土地のちりで形作られた人が生きものとなったそのプロセスにおいて特異なのは、神である主がその鼻に**いのちの息**を吹き込まれたという点です。

新改訳は「生きもの」という表記 新共同訳は「生きる者」、KJV は a living soul、NIV は a living being と訳されています。原語は「**ネフェシュ・ハツヤー**」**תַּיָּה נֶפֶשׁ** 七十人訳では「**ブシュケー・ゾーエー**」(ψυχη ζων) と訳されています。直訳は「生きている魂」です。「ネフェシュ」の旧約聖書での使用頻度は 754 回です。

●「ネフェシュ・ハッヤー」は人間特有のものではなく、いのちある者、生けるものすべて「ネフェシュ・ハッヤー」です。創世記 1 章 20, 24 節、2 章 19 節の「生き物」も同じく「ネフェシュ・ハッヤー」です。ただし、1 章 21 節の「生き物」だけは形容詞の「ハッヤー」に冠詞がついた形で「ネフェシュ・ハッヤー」**נְפֻשׁוֹתַי הַחַיִּים**です。新改訳も新共同訳も同じく「うごめく生き物」と訳しています。

●「ネフェシュ」は、創世記 2 章 21 節にはじめて登場する「肉」(バーサール) **בָּשָׂר**と共に、人間を構成する重要な要素で、「息、たましい、いのち、自身、願望、望み、喉」という意味をもつ非物質の部分です。「ネフェシュ」は、「魂(たましい)」という訳以上に、「願望」「喉」という意味を持っているということが注目点です。なぜなら、そこに「ネフェシュ」本来の意味があるからです。単なる身体的能としての「喉」を表わすだけでなく、飢え渴く存在、必要の塊、切望、欲望、旺盛な食欲、外から何かを得ることなしには生きられない存在、満たされることを常に求める存在を表わしているように思われるからです。こうしたニュアンスは、「魂」、あるいは「生ける魂」という訳では到底表わし切れません。私的には、赤子と同様に、必要の塊的存在、それがネフェシュの本体だと考えています。つまり、すべての「ネフェシュ・ハッヤー」は、神のように自存できない存在、常に依存しなければ生きられない存在として造られているということです。

●特に人間の場合は、すべての必要が神によって与えられて生きる者として造られたということが、他の被造物と決定的に異なる点です。そのことを指し示しているのが、神が人の鼻に「いのちの息を吹き込まれた」という事実です。

●この箇所にある「いのちの息」の「いのち」が複数形の「ハッイーム」**חַיִּים**であるにもかかわらず、ほとんどの訳が単数形のような訳となっています。ちなみに、その後の「息」(breath)と訳される「ネシャーマー」**נְשָׁמָה**は単数です。これは、ヘブル語の「神」を表わすことばが複数形の「エローヒーム」**אֱלֹהִים**で使われているにもかかわらず、その動詞の「造られた」という動詞が単数であるのと似ています。複数形で現わされる神は、神の三位一体的啓示と理解しますが、2 章 7 節の「ハッイーム」**חַיִּים**も同様に考えることができるように思います。つまり、**複数形で表わされる「いのち」は、同じく複数形であらわされる「神」と同義だということ**です。**むしろ、重要なのは「息」の方です。**というのも、人間以外のすべての「生き物」は、いのちの本源である神によって「生き物」ものとされていますが、人間の創造だけは神の息が吹き込まれて、はじめて「生きもの」とされているからです。

●神の「息」は、七十人訳では「プノエー」(**πνοη**)というギリシア語が当てられています。新約聖書での「プノエー」は、「息」(使徒 17:25)と「風」(使徒 2:2)として 2 回しか使われていませんが、「風、息、霊」という意味が込められた「プニューマ」(**πνεύμα**)と同義であると見なしてもよいと思います。なぜなら、両者はいずれも「呼吸する、吹く」を意味する共通の動詞「プネオー」(**πνεω**)を有しているからです。

●「息を吹き込まれた」の「吹き込む」と訳された「ナーファツハ」**נָפַח**は、炭火を吹き起こして煮え立たせるという意味です。火は息(風)を吹きつけることで勢いよく燃えます。水の中に溺れて仮死状態になっている者に、息を吹き入れて生き返らせることがあります。人間の場合も、神の息が吹き込まれることで、はじめて「ネフェシュ・ハッヤー」となったのです。ですから、死は、神のいのち「息」を喪失したことを意味します。そうした死から回復す

るには、神の息を再び吹き入れていただくしかありません。エゼキエル 37:9 では、主は、エゼキエルに死んだ者を生き返らせるために、「息よ。四方から吹いて来い。」と預言せよと命じています。エゼキエルがそのようにすると、「息が彼らの中にはいった。そして彼らは生き返り。自分の足で立ち上った。」とあります(39:10)。

●また、「神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。」(ヨハネ 3 章 34 節)とあるように、神のいのちの「息」は、神と人をつないでいるいのちの「ことば」と同義です。

●神のいのちの「息」が人に吹きこまれたことによって、人は他の被造物とは異なる存在、つまり、神と親しく向き合うかかわりを持つ存在となりました。もし、この神のいのちの息を喪失したならば、「人はその栄華の中にあっても、悟りがなければ、滅びうせる(ほふられる)獣に等しい」(詩篇49:20)とあるように、他の生き物となんら変わらない「ネフェシュ・ハッヤー」となってしまいます。神の与えてくださる賜物としての「いのちの息」(主の御霊、聖霊)と神のことばこそが、神と人とのかかわりを回復させ、人を本来のトーヴ・メオッドな存在として回復させてくださるのだと信じます。

2013.12.2

めいがた